大部っ子

大部小だより

令和４年12月

「やさしく　かしこく　たくましく」－自ら学び、ともに生きる児童の育成－　　文責：学校長

脳科学理論による『小中一貫教育』

吉　岡　　優

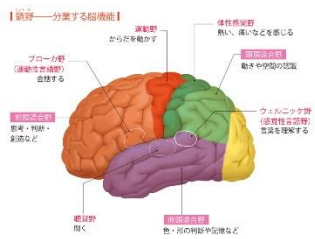
総務省が発表している右グラフでも明らかなように日本は「少子高齢社会（1995 年以降）、人口減少社会（2015 年以降）」にすでに突入しています。一方、社会構造は「グローバル社会、超スマート社会」へと移行が進行中、さらには国際政治及び経済情勢は「社会の根底にある信頼と安全安心への不安」が顕著です。そんな中、未来を切り拓く原動力は　“**人づくり**”、　すなわち**教育**といえます。今後、世界を舞台に自立してたくましく活躍できる人材に必要な力は『生きる力』や『柔軟な思考・対応力』であり、その育成の重要性を認識しているところです。

さて、本市では平成１７年より東北大学川島隆太教授を教育行政顧問に就任いただき、＜**脳科学と教育**＞ を理念とした特色あるオンリーワン教育事業　『夢と希望の教育』　（現在は【第Ⅲ期】令和３年４月改定）を推進しています。川島隆太教授の脳科学理論についてお話します。

大脳には２回の大成長期がある

人間の大脳の前頭前野が急激に成長する時期が２回あるといわれています。１度目は**０～３歳の頃**で、この時期の脳は「**受け入れる**」ことに適しており、特にコミュニケーションとスキンシップが大切とされ、親や教師が子どもたちによく関わり、　基礎的なことをしっかり身につけられるようにすることが重要とされています。次に、**１０歳～２０歳頃**にかけて、　前頭前野は２度目の急成長の時期を迎えます。　特に、１０歳からの脳は、自立に向けて「**自ら考えて行動する**」　ということに適しています。この変換期を『**１０歳の壁**』といい、この時期を迎えた子どもたちの主体的な行動を支援し、『自立』を手助けすることが重要とされています。

前頭前野を鍛えるための方法とは？



ヒトの脳

前頭前野を鍛えるためには、難しい問題を解くよりも、**声を出して文章を読む、書く、計算をする、会話する、手や指を使う、十分に寝る、朝ごはんをしっかり食べる**、このような基本的なことを続けることが大切だということがわかっています。だからこそ、学校では**座学による学び**の充実はもちろんのこと**体験的な学び**も重視しながら、教育課程を編成しているところです。

小中一貫教育の目指すところ

そこで小野市では就学前教育から義務教育修了までの充実を図る 『**１６か年教育**』、基礎学力の育成と家庭での自学自習の習慣化、そしてチャレンジ精神の育成を目的とした『**おの検定**』、小学校高学年における教科担任制、理数教育の充実を図った 『**小中一貫教育**』、さらには小学校の『**英語（活動)**』、 将来の交渉能力の基盤となるコミュニケーション能力の育成、さらに一昨年度より始まった国の GIGA スクール構想のもと小野市独自の『ONO GIGA Schoool Project』などの特色ある教育を展開しているところです。

本市の 『小中一貫教育』の目的は**「学力のさらなる向上」**と**「子どもたちのさらなる成長(社会性の向上)」**を図るものです。平成２８年度より市内すべての学校で小中一貫教育が本格実施されたのは周知のとおりです。 すでに７年が経過し、自然な形での小中一貫教育が行われていることは言うまでもありません。しかしながら、時代は大きく変化しています。それこそ、**「今まではこうであった、こうしなければならない」といった前例踏襲を打破**し、私たちの「柔軟な思考・対応力」が求められているのではないでしょうか。教育のめざす方向はそんなところにあるのかもしれません。

11 月の大部は＜学びの秋＞

1 日（火）は６年生の中学校一日生活体験、9 日（水）は 5 年生の第 19 回川島隆太講演会、15 日（火）は前田良さんによる人権講演会がありました。また、子どもたちは一人一鉢運動と題し、パンジーなどの花苗を植えつけました。今後、学校はこの１年のまとめや次の学年への準備を含め、座学と体験学習の充実を目指して取り組んでいきます。